

## 2020 年度教職研究科FD活動「年間まとめ」

### ①1 年間の取組内容

- 春・秋セメスターごとに授業評価アンケート（「授業内容について」「授業の進め方について」「受講生の取組について」という3観点から14項目）を実施し、その結果の分析、各教員からの総括、次年度の改善点等を話し合った。
- 研究科アンケートをM1、2ともに実施した。M1は「教育課程について」「授業について」「学生支援について」「全体を通して」という4観点から19項目、M2はそれに「実践探究論文」という観点を加えて5観点から23項目について問うた。本年度の結果は5月以降に明らかになる。
- 他の教職大学院の動向等について調査を実施した。調査のテーマは、前年度から継続して「教職大学院における教科内容学と教科教育学の連繋」、「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」「発達障害児童生徒への対応に関する科目のあり方」の3つである。当初の計画では訪問調査の予定であったが、コロナ禍の状況を鑑み、情報収集を中心とする方法に変更した。また、前年度の調査をもとに、『実践教育研究』第2号にて、テーマごとに研究ノートとしてその成果を公表した。
- 春・秋セメスターに授業公開週間（7/6～10・12/14～18）を設け、教員相互の授業参観を実施した。最低1回は授業を見学することを義務づけた。授業担当者とは「授業公開実施報告書（様式A・B）」を書き、各自の授業を振り返った。なお、春学期については、オンラインでの参観となった。また、例年であれば、受験希望者等、学部生や学外からの参観も可能であったが、今年度はコロナ禍の状況により、外部からの参観はゲスト講師等に限定的なものとなった。
- カリキュラムのあり方を検討する材料とするために、院生に「学びのポートフォリオ」を春・秋セメスターごとに実施し、各教員からFD委員会に「学びのポートフォリオ」の活用方法の報告を求めた。なお、活用の促進を図るため、他の教員の活用方法を参考にできるように、報告様式である「活用票」に昨年度の活用例を要約して掲載した。
- 修了生フォローアップ  
修了生の勤務状況から本学の教員養成の成果と課題を理解することと、修了生の直面している課題や悩みに関するサポートを行うことを目的として、2期修了生のうち近隣の連携教育委員会に正採用された者を対象にフォローアップ調査を実施した。

### ②取組の中で明らかになった成果と課題

#### ○授業アンケート

アンケート結果の分析は、以下の通りである。

- ・春学期・秋学期ともに、多くの項目において、前年度より改善している傾向が見られた。
- ・オンライン授業となった今年度の春学期は、特に下記4項目において、前年度の春学期に

比べて大幅に改善しており、その改善幅が秋学期のそれと比較してもなお顕著であった。

(10) チームティーチングによる授業方法は有効でしたか。(該当する科目のみ記入)

(14) 授業以外にこの科目に費やした学習時間は一週間あたりどの程度ですか。

(15) あなたはこの授業に関する文献を自分から進んで読みましたか。

(16) あなたはこの授業の内容を現場で生かすための方策を主体的に考えましたか。

・ 2020 年度秋学期は、「(4) この授業のレベルはあなたにとって適切でしたか」の項目において、「易しかった」という回答が前年度秋学期に比べて大幅に減少した。

・ 上記 14～16 の 3 項目「受講生の取組について」については、改善が見られてはいるものの、依然として授業外の学習時間が 1 時間未満の学生、授業に関連する文献を読むことをしていない学生が 2～3 割程度いる状況である。この点は FD 懇談会でも議論され、文献の提示方法（リスト化や資料集の作成）等、主体的に学ぶ姿勢を身につけさせるための一層の工夫が課題として共有された。

#### ○研究科アンケート

2020 年度（2021 年 3 月実施）は、在学生 27 名、修了生 23 名、計 50 名から回答を得た。2019 年度はコロナ禍により十分な回答が得られなかったため、主に 2018 年度の結果との比較から傾向について分析した。

2018 年度と比較して「とてもそう思う」の回答が大幅に増加した設問としては、Q4.「教育課程(カリキュラム)は、学校づくりの有力な一員となりうる新人教員の養成、並びにスクールリーダーの養成を果たすのにふさわしいものとなっていますか」(22.2%→58.0%)、Q8.「大学院で開講している科目は学びを深めるのに有効でしたか」(42.9%→74.0%)、Q11.「研究者教員と実務家教員のゼミ(演習)指導は教職大学院での学びを深めるために有効でしたか」(39.7%→88.0%) が注目される。また、Q13.「立命館大学大学院教職研究科における教員採用試験への支援体制は適切でしたか」という設問において、「適切だった」と「まあまあ適切だった」(計 57.1%→84.0%) という肯定的な回答が大幅に増加しており、顕著な改善が認められた。加えて、Q19.「知り合いから、立命館大学大学院教職研究科への入学について聞かれたら薦めますか」という設問では、「すごく薦める」(28.6%→54.0%) が大幅に増加した。

ただし、Q6.年間を通じて行われているフィールドワークの回数が「少なかった」との回答が多くなっていた(11.1%→32.0%) が、修了生(8.7%)よりも在学生(51.9%)において顕著であった。コロナ禍の影響によるフィールドワークの中止やゲストスピーカーへの変更等が要因と考えられる。

自由記述では、教員との距離の近さと細やかな指導、スタマスと現職が共に学ぶこと、院生講師制度等が本研究科の強みとして多く挙げられていた。課題としては、学生確保、学費、教科の専門性、院生講師以外の実践の場、ゼミ教員の希望制、評価基準、より生徒理解につながる科目の必要性、事務連絡、教採との折り合い、教員以外の進路への支援といった記述が見られた。

#### ○他の教職大学院への調査

国立大学の教育学研究科から教職大学院への全面移行の動きに対応して、「教科内容学と教科教育学の連繫」をどのように図るか、現職院生の獲得のために「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」をどのように確立するのか、今後ますます求められる「発達障害児童生徒への対応に関する科目」を充実する 3 つの課題について、次のカリキュラム改革の重要な柱となるため、前年度の調査結果も含めて、カリキュラム改革委員会の議論に活用され、発達障害児童生徒への対応に関する科目についてはシラバスの試案作成にもつながった。また、双方向遠隔地授業の方法については、今年度の春学期、コロナ禍によるオンライン授業の実施に際してリアルタイムで役立てられた。来年度も「教科内容学と教科教育学の連繫」と「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」については、継続的に調査、検討、実施することになった。

#### ○授業参観

年間 1 回以上の参観を義務づけている。授業アンケートの結果が改善されたことに甘えるのではなく、「主体的な学びを促す工夫」「授業における課題のあり方や発展的な学習」といった課題に対応するために、他の教員の授業に学ぶことを継続したい。

#### ○「学びのポートフォリオ」

院生には学びの振り返りのために「学びのポートフォリオ」の提出を年間 2 回義務づけているが、教員がこれを院生指導において有効活用する上で改善が急務である。前年度から「学びのポートフォリオ」の活用方法を「活用票」により報告するよう求め、今年度の様式改善により様々な活用の工夫が共有されたが、「学びのポートフォリオ」の提出後 1 ヶ月程度の期間での集中的な活用を求めていることに限界がある状況も見えてきた。今後、より継続的な関わりの中で「学びのポートフォリオ」の作成プロセス自体に教員が伴走することも想定しながら、manaba+R のレポート機能を用いて「学びのポートフォリオ」を提出・活用する方法等について検討を進めたい。

#### ○修了生フォローアップ

修了生の勤務状況から本学の教員養成の成果と課題を理解すること、修了生の直面している課題や悩みに関するサポートを行うことを目的にして、前年度から修了生のフォローアップを実施することにした。今年度は近隣教育委員会の正採用者を対象として実施したが、コロナ禍の状況によりその一部はオンライン面談および郵送等での書面調査となり、収集した情報は限定的であったものの、今後の改善等に向けて有益な示唆が得られた。

具体的な調査方法は次の通りであった。管理職には「Ⅰ 服務全般についての印象」「Ⅱ 優れている点について」「Ⅲ 改善すべき点について」「Ⅳ 教職大学院でもっとつけておくべきだと思われることは？」の 4 点について聞き取りを行い、修了院生評価アンケートを取った。修了生評価アンケートとは、授業力（授業構想、授業展開、授業評価）、生徒指導力（児童理解、学級経営、特別活動・部活動）、職務遂行力（意欲・態度、事務処理能力、コミュニケーション力）、省察力、連携する姿勢・力、職業倫理という 6 項目 9 要素につい

て、当該修了生の特に優れている点、改善すべき点を調査するものである。修了生には、「Ⅰ 勤務の概況」「Ⅱ 赴任以来、とく苦勞していることは何か」「Ⅲ 日々の勤務の中で、大学院での学びが活かされていると感じることは?」「Ⅳ 教職大学院でもっと学んでおけば…、研究しておけば…よかったと感じていることは?」という4点について面談した。

調査の結果、管理職は修了生の「Ⅰ 服務全般についての印象」について、概ね良好な印象をもたれており、特に生徒への愛情やコミュニケーションが高く評価されている。一方、教科指導の力量において課題があるとの評価も見られた。「Ⅱ 優れている点について」は、ICTの研究指定において力量を発揮した修了生がいた点が特筆される。また、職員間や生徒との信頼関係に関する記述も見られた。「Ⅲ 改善すべき点について」は、前年度と同様に積極性の欠如についての指摘が見られた。また、教科の専門性について一層の向上を求める記述もあった。「Ⅳ 教職大学院でもっとつけておくべきだと思われることは?」として挙げられたものとしては、メンタルヘルスやトラブル解決に関連しての援助要請、強化の専門性、実習の充実等が挙げられた。修了生評価アンケートの結果は、生徒指導力（特に児童理解）と職務遂行力（特にコミュニケーション力）の評価が高かった。一方で、授業力（特に授業展開）、省察力等には改善すべきとの評価も見られ、前年度の傾向とはやや異なる面もあった。また、対象となった修了生の多くは1年目から学級担任となっているが、生徒指導力の中の学級経営については、優れているとの評価が1件のみで、他の項目より少なかったが、改善すべきとの評価は見られなかった。なお、今回新設した任意の所見欄では、きめ細かな対応やICT活用能力の高さ等、高い資質・能力を評価するコメントが見られた。

修了生の聞き取りの結果、多忙な生活（初任者研修での移動等を含む）、部活動の指導、授業力づくり（特別支援での教科指導を含む）、就職指導、職場の人間関係など様々な悩みを抱えていることがわかった。調査担当教員からそれぞれに丁寧にアドバイスをを行った。「Ⅲ 日々の勤務の中で、大学院での学びが活かされていると感じることは?」という問いには、ピアサポートに関する内容が数多く挙げられた他、ケースカンファレンス方法や授業づくりや教材研究、カリキュラム作成（総合的な学習の時間を含む）、さらには専門研修での経験が現任校の特徴と重なって生きているなど、多岐にわたった。「Ⅳ 教職大学院でもっと学んでおけば…、研究しておけば…よかったと感じていること」については、教科の専門力量、外国にルーツを持つ子どもやLGBTを含む特別支援教育、そして今年度はコロナ禍でのオンライン授業が展開されたためか、ICTの活用に関する記述が目立った。また、新学習指導要領の実施に関連してか、非認知能力等の教育評価に関する記述も見られた。本研究科の強みであるはずの内容が含まれている点については、修了生が所属していたコース以外の事柄を指摘する点で前年度と共通しており、カリキュラム改革の検討とともに、履修指導のあり方の改善（特に他コースの選択科目の履修促進等）に活かすべき課題が明確になった。

### ③次年度の取組内容

・開設から5年目を迎える2021年度は、認証評価の機会も活用しながら、これまでのFD

/SD 活動について課題を明確化する。その上で、必要な改善を図りつつ、教職員にとって過度な負担とならない持続可能な形でより効果的な取組となるよう全面的な見直しに向けた検討を行う。特に、今年度はコロナ禍の状況もあって具体化を進められなかった「外部評価委員の意見を反映した FD 活動」のあり方について、すでにある仕組みの活用も含めて課題を整理する。

- ・組織的な調査研究の取組として、継続している 2 つのテーマ「教科内容学と教科教育学の連繋」「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」に加えて、「学部学生の早期履修及び単位互換等の制度設計」に関するテーマを新たに立ち上げ、継続的なカリキュラム改革の議論に反映させるとともに、入学者の確保方法に関する検討にも連動させる。